

## 1年間の研修で感じた旭川

氏 名 姜 信九  
出身国 大韓民国  
受入自治体 北海道旭川市  
研修先 旭川市役所



### 1. 本事業に応募した動機

大学に入学した後、独学で日本語を勉強し始めました。大学を卒業して水原市の公務員として働き、土日には水原駅の前にある水原観光案内所で英語と日本語のボランティア活動をしながらか日本に行きたいと思いました。そして、水原市と旭川市が公務員の相互交流派遣を決めたことによって申請書を提出しましたが、選ばれず3年目になってからは結婚で放棄しました。それから、19年経った2013年、最後のチャンスという考えで申請書を提出し、5月19日、日本に向けて出発、1年間の研修を始めるようになりました。研修の目的は両市の行政を比較して、さらに発展された案を探して、水原市に適用しようと参加するようになりました。

### 2. 研修の概要

2013年5月19日に韓国を出発して成田空港に到着するとともに1年間の日本の生活が始まりました。財団法人自治体国際化協会(CLAIR)の職員の案内で3日間の東京研修を受けて、そして、滋賀県の大津市にある全国市町村国際文化研修所(JIAM)に新幹線と電車に乗って到着した。JIAMは水原市にある地方行政研修院と似たような教育機関でした。JIAMでの生活はとても忙しくて大変でした。日本語の授業と発表のための準備は多くの時間が必要でした。それでも、各国から来た26人の仲間と日本語を習って、文化を体験しながら過ごした1か月が名残惜しく、別れを悲しみ、降っていた雨は大阪の関西国際空港に到着してからもっと激しく降りました。



ホーム・ビジットの家族と共に

ちょうど、11年ぶりに再び訪れた旭川……

私にたくさんの思い出を与えたところでした。

ここで11か月間、一人で、生活することを考えると涼しい風がさらに冷たく感じられました。私が住むアパートに到着して荷物を整理して月曜日から転入



申告、健康保険と年金の加入など基本的な手続きを終えて開始した初研修、面くらってしまった気分で議会事務局の業務を職員から説明を聞いた後で、議会の施設を見て回りました。

旭川市と水原市の共通的なものは市の庁舎と議会の庁舎が同じ建物にあるということでした。水原市は韓国で財政規模や人口の面で、一番大きな都市だが、小さな都市にもある議会庁舎がなくて会議は市庁舎の3階と4階を使用しており、これをそのまま認めた水原市の議員たちに深く感謝を致します。

そして、続く総合政策部の研修、日本のまちづくりについて関心が多かった私は大きな期待を持って研修に取り組みましたが私が思っていたのは全然違っていました。水原市の「まちづくり」は自分が住んでいる町を変化させて住民が暮らしやすく、良い町に作っていくことでしたが、研修をしながら感じたのは、地域発展のため企画をする部署であり、以前は企画課だったという話を聞きました。それでも少ない人数で職員たちが苦勞をし、その多くをまちづくりのために努力しているのが本当に良かったです。2002年に来た時と全く変わった旭川駅辺り、そして駅の後方の変化されていく姿をみながらとても美しい都市だと考えて、とてもうらやましいと感じました。

また、水原市にはない、旭川空港の施設見学、市庁舎の中にある健康検診センターなど、職員のための福祉施策が私の目を引きました。車に乗って通いながら旭川のあちこちの土地価格を知らせてくれて、住宅の財産税の賦課基準を教えてくれた税務部の職員たち、4日間、一緒に通って市政広報放送のため撮影から録音、編集まで詳細に見せてくれた広報公聴課、農政部、環境部など、全部署を絶えず行き来しながら、事務室で、現場で、時には遅い時間まで住民たちと一緒にする席に、そして若い職員たちと市長が虚心坦懐に話し合う会合にも参加しました。準備した部署も参加者も度を過ぎない、ありのままの自由な雰囲気が私たちと全く違う姿でした。

市役所で推進した研修とは別に様々な体験研修を通して外国人が早く日本の文化に適応できるように民間団体で準備した'友達作り'は大きくなくて多様でもありませんが素朴な楽しさを感じ、お互いの親近感を十分に表現できる良いプログラムでした。

日本の生活の半分を整理し、担当者と一緒に神奈川県から静岡県まで行った国内研修はこれまで日本の多くの地域を業務で行って来た私を感じられなかった新たな文化の体験でした。昔、江戸時代の東京に向かった大名行列が通った道に沿って10月中旬の天気にも汗を流しながら4時間を越えて歩いて、秦野市



外国人と友達作り



と藤枝市を訪問し、国際交流関係についてお互いに多くの対話を交わして小さな地域であることにも在日韓国民団と良い関係を保ちながら様々な行事を開催することを聞いて色々とお金をかけなくても市民たちが楽しくて幸せになれる方法が多いということを感じる時間だった。

旭川の研修中、準備に多くの時間と努力を自分に投資するようになりましたが、そのどんな研修よりも感銘深かったのは教育委員会の研修。小学校5、6年生の子供たちと一緒に遊びもして、勉強もするために準備すべきこと、パワーポイントと説明資料を日本語で作るためにきちんと寝られずに、緊張して送った時間。



旭川中学校の社会授業

いざ子供たちの自由な姿を見ながら子供たちが私のために歌ってくれた

「故郷」を聞いたら緊張が解けて大きな感動を受けました。小学校に続き、中学校2年生の生徒たちと共に進行した社会の授業時間、教科書にある「韓国の産業」の過去と現代を比較できる「韓国産業の発展について」というタイトルのパワーポイントを作って一緒に授業をしてから全校生徒に韓国の文化や水原の観光地について簡略に紹介もしました。この席で学生たちが見せてくれた剣道試演や合唱は私の不足な準備をさらに恥ずかしいようにしました。校長先生の優しさや親切さに大変だった授業が春の雪が溶けるように溶けました。しかし学生たちの思い掛けない質問は私を戸惑わせたりもして笑いを与えることもできました。

現在、旭川駅の隣にあったホテルを崩してそこに大型ショッピングモールであるイオンを建築していますが、駅の壁がイオンと連結できるように壁を崩しやすいように作ったという説明を聞きました。ところで驚くべきことはこのすべてが20年前に旭川駅周辺の発展計画を樹立しながら、計画されていたものであり、そのすべてがもう完成を控えているということでした。一寸先も見ずに現在の利益のために努力した私たちを見つつ、未来に向けて、子孫たちのために、自然を保存し、都市を作っていく旭川。そして30年以上経った机などを使用している職員たちを見ると、これまで私たちはあまりにも間違っていて生活しているという考えを持ちました。

### 3. 帰国後の展望

人口120万人の水原市も10～20年後の未来に向けたまちづくりと事務用品を節約して、長く使用する精神を持つべきであり、また、現在の日本で推進している多様で内実ある国際化のプログラムなどは私が最も関心を持ち、国へ帰ったら水原市に合わせて作ってみようと現在、資料を収集するなど準備している分野です。いつの間にかあの多くの部署の研修も職員たちの準備と努力によっ

て、苦勞なく終わらせることができることと、忙しい時間の中でも親切に案内してくれたことに感謝を申し上げます。

もう帰国まで2か月しか残っていませんが、もっと多くの文化を体験して住民たちが自ら作って行った真のまちづくりと様々な祭り、そしてよく保全された自然を盛り込んだアルバムを作るために、太った体ですが、心だけは忙しく動いてみようと思います。



## 旭川市での研修を終えて

氏 名 アムガー バットトゥムル  
出身国 モンゴル国  
受入自治体 北海道旭川市  
研修先 都市建築部・土木部・上下水道部ほか



### 1. はじめに

まずは、日本で専門研修を受ける機会を与えてくれた旭川市役所と CLAIR の皆様に感謝していることを申し上げます。

私は、2007 年からウランバートル市役所の基本計画局都市計画課に都市計画建築技師として勤めており、主に、ウランバートル市都市開発マスタープランと地区詳細計画の作成及び実施管理に関する仕事をしています。

ウランバートル市は、歴史が古く 374 年の歴史を持つ都市ですが、現代の都市開発が行われたのは約 100 年前のことであり、旧ソ連の支援・影響が大きくありました。1990 年に市場経済に移行してからは、自分たちで都市計画・開発を行うようになり、現在の姿に至っています。

ここ数年で、ウランバートル市の人口が急激に増加し、計画上の人口密度を遙かに超え、様々な都市問題を抱えるようになりました。既存市街地が徐々に拡大してきたものの、社会インフラの整備が遅れ、乱開発（品質不良な建設・開発）が行われてくるとともに、大気汚染、土壌汚染、交通渋滞、犯罪等の問題も起きています。これらの問題を解決するには、住民及び民間の理解・協力の下での法整備、また、人材育成にも力を入れるべきだと思います。

モンゴルは、都市開発分野では世界大都市の急速な発展から遅れているので、先進国の大都市と肩を並べ、健全かつ安全な住環境整備、国民の特性に適應した世界レベルの都市開発が早急に求められています。それを達成させるために、先進国の事例を参考に都市開発の研修・研究に取り組んでいます。

そこで、日本は高い技術や伝統、社会、経済、急速な都市開発整備を誇る世界有数の国であります。今回の研修でウランバートル市が直面している課題・問題の解決方法を探り、日本の都市計画政策及び法整備、建築技術、開発行為等を含めて研修することが目的でした。

### 2. 研修の概要

モンゴルを離れ、初めて足を運び入れた日本は私にとって別世界でしたが、日々の授業や友達とのやりとりで日本文化、日常生活に少しずつ慣れていきました。

最初の 1 か月半は、滋賀県大津市の JIAM で日本語の研修を受けました。

研修中は、様々な企画に参加することで日本だけではなく他の国の研修生と仲良くなり、交流することができました。

続きまして、7月5日から北海道第二の都市である旭川市で、専門研修がスタートしました。空港に着陸したその瞬間に感じた旭川市の第一印象は、自然が美しく、故郷のことを思い出させるような穏やかな風吹きが迎えてくれたことが心の中に刻まれました。それから、研修受入先である旭川市役所での研修がスタートし、同僚の皆さんの親切な「おもてなし」のおかげで研修を無事に終了させることができましたと思います。

専門研修は、都市計画・開発上のあらゆる分野が広く浅く触れられており、旭川市での研修を通して、日本の都市計画制度、歴史、法整備、土木・社会インフラ整備、施工方法、技術基準等を学ぶことができ、嬉しく思っております。

研修では、まず、日本の都市計画・開発に関する法律、基準、条例等を紹介していただき、次に、これらを基に作成された旭川市の都市計画図書に関する講義や現場視察という順番であったことがわかりやすかったです。

研修先は、都市建築部、土木部及び水道局等の各課であり、日本の都市開発の特徴として、住民の参加を基に開発計画を作成していくこと、土地及び不動産の評価、契約締結方法、用地取得方法、土木工事、技術基準の遵守、施設の維持管理等について担当部局の技術者が研修の講師を務めてくれました。

研修中は、日本人の国民性ともいえる「計画性」と「責任感」について実感しました。また、都市開発に関する日本の成功した事例はもちろんのこと、失敗事例も素直に紹介してくれたことは、今後モンゴルも日本を参考にし、失敗の道を歩んでほしくないという温かい気持ちの証だと思います。研修中は、多数のアイデアが浮かんでいたもので、それらを書き留め、忘れないように頭の中に入れておきました。

専門研修は旭川市以外に道内視察研修と道外視察研修もありました。視察先は私の希望を配慮していただき、道内は函館市、道外は東京都等を視察しました。函館市に関しては、旭川市と違って港湾都市ということで、歴史をはじめ都市計画、開発、雰囲気も異なっていました。それから、本州と北海道を結ぶ北海道新幹線鉄道整備事業の一環として、新函館駅舎、総合車両基地、線路建設現場と区画整理事業を案内してもらいました。

道外視察に関しては、日本国の首都でありながら都市施設として世界的にも有数である東京都では、押上・業平駅周辺土地区画整理事業、晴海地区や大橋地区の市街地再開発事業等を、千葉では幕張新都心整備事業等を視察しました。道内外の視察研修では、近くに有名な場所も多数あったことから、気分転換できて嬉しかったです。

それから、専門研修以外では、北海道の美しい自然と歴史の拠点になった観光地、伝統的な儀式・お祭りに参加することで日本文化に触れられる事ができました。夏祭りでは、旭川市役所の同僚達と一緒に舞踊パレードに出た



り、御神輿を担いだり、一般の市民と交流して、楽しく時間を過ごしたことが心の中に刻まれました。

7か月の研修でしたが、日本語と専門分野でスキルアップできたほか、来日したからこそ日本文化・習慣を身近に触れることができ、日本人の価値観、仕事のやりとりが分かった有意義な研修だったと思います。



夏祭りの舞踊パレードに参加

### 3. 終わりに

日本は、モンゴルと比べると都市計画まちづくり分野で豊富な実績を持つ国であります。これら実績を積み重ねた結果、都市計画政策を十分に配慮した法律、規則、基準が整備され、各事業が円滑に進行されていることを、研修を通じて知ることができました。

一方、モンゴル国ウランバートル市の場合は、都市計画及び建設工事の品質管理に関する法制度が不十分であり、かつ整合性が保たれていないことが都市開発推進上の課題になっています。それから、民間及び住民を中心とした都市開発を進行させるには、ゲル地区の土地評価及び管財に関わる法制度も欠けていることから、民間及び住民の理解が十分に得られない場面も多少あります。従って、これら法制度整備のために力を入れていきたいと思っています。また、現在、モンゴル政府ウランバートル市は、大気汚染、土壌汚染、環境汚染の原因になっているゲル地区の再開発事業及び道路整備事業、インフラ整備事業等のプロジェクトを数々実施しているので、日本で学んだことを参考に、助言なり、情報提供なり、自ら積極的に参加していきたいと思っています。

そのほか、日本の都市再開発事業、土地区画整理事業、開発行為による新開発事業等の実施に当たって、都市景観及び快適な住環境整備に配慮した一体的な事業推進方法に取り組んでいることにも関心を持ちました。この各事業は、モンゴルでは JICA を通じて実施されていますが、ゲル地区に限定されがちであるため、ウランバートル市内の幾つかの事業地区で、これらの事業方式を活用し、経済的で財布に優しい方式で実施することを考えています。

それから、環境部でのゴミ処理に関する研修も良かったです。モンゴルは、ゴミ分別・処理方法は遅れているので、衛生面で環境に悪影響を与え、経済的にも無駄が大きい分野です。従って、日本のゴミ分別・処理に関する法律、規則を参考にモンゴルの現状に適した、かつ民間の力を生かす制度づくりに貢献したいと思っています。

最後になりますが、都市計画・開発に関する幅広い分野に触れられた貴重な研修でした。蓄積した知識・経験を母国で待っている同僚達に提供し、国の発展に貢献したいです。日本で得た数々のノウハウを生かすため、希望にあふれた気持ちで帰国します。

ありがとう、旭川。ありがとう、みんな。



## 平成 25 年度自治体職員協力交流事業報告書

氏 名 ダワーサンブー ゲネンドウラム  
出身国 モンゴル国  
受入自治体 北海道滝川市  
研修先 滝川市役所



### 1. 本事業に応募した動機

モンゴル国ウブスハンガイ県で稲作栽培を実施しており、私は 2012 年にハラホリン村で稲作試験栽培に参加しました。元 LGOTP 研修員や日本人指導員のアドバイスを  
受け、栽培を行った結果、村で一番収量が取れ、専門家になり、2013 年日本で農業  
研修を受けるチャンスを得ました。

また、私の住んでいるハラホリン村は県の中で、一番畑作が盛んな地域ですので、  
稲作栽培技術以外にも日本の畑作の技術が勉強したいと思い、本研修に応募しました。

### 2. 研修の概要

日本での研修内容は以下の通りです。

- ①滋賀県大津市で1か月日本語・日本文化理解コースに参加しました。
- ②6月20日から北海道滝川市で農業技術習得研修に参加しました。

農業技術習得研修内容は：

- ・来滝直後研修員用の畑に各種類の野菜の苗を定植しました。
- ・研修員用の水田に稲の苗を定植し、収穫まで定期的に調査を行い、収穫後も収量やたんぱく質、アミロース等の調査を行いました。
- ・毎週一回稲作栽培技術の講義を受けました。
- ・市内の農家で野菜の作り方を教えて頂き、一緒に植え、管理をしました。また、農家から苗や種を頂き自分の住んでいた会館の外で植えました。
- ・普及員や農家、専門家から秋播小麦、豆類等の栽培方法、果樹園の管理方法を習いました。
- ・林業試験場で植林方法を習う他、防風林の作り方や管理方法を教えて頂きました。滝川市をはじめ日本はお花や緑が多いです。これは環境にも良いし、そこに住んでいる人々、観光客にすごく良い印象を与えていることに気づきました。帰国後、是非自分の地域で緑化を進めたいと思います。
- ・市外の札幌市、旭川市、富良野市、岩見沢市、芦別市等の研究機関、J A、ワ

イン農場等を訪問し、視察しました。

- ・市内の NOSAI、普及センター、J A滝川、花野菜技術センター、種苗センター等で研修を受けました。日本の農業研究機関、種苗センターの活動が優れていて、常に良品質の種と苗を農家に提供していることは日本の農業分野の進歩に大きく影響していることが分かりました。
- ・各種の野菜、果物を使った調理実習、豆腐、バター、アイスクリーム、クッキー、ジャム等の作り方を習いました。

### 3. 帰国後の展望

- ・村長に研修報告をし、今後のモンゴルでの活動について打ち合わせをします。
- ・他の研修員と相談し、研修で身に付けた技術を地域で普及させる計画を立てます。
- ・日本の農業技術紹介教科書を作成し、講座を開きたいと思います。
- ・ハラホリン村でリンゴを試験的に栽培します。また、地域の緑化を進めるべく植林方法、花壇の植え方を教える講座を開いたり、実際に植えてみたいと思います。
- ・玉ねぎの栽培を普及させるよう計画を立てます。
- ・稲作栽培普及計画の実施に積極的に参加します。今までモンゴルで稲作栽培を実施する中で問題になる点はいくつか挙げられます。例えば：川水が少ない、土壌は砂地が多い、積算温度が足りない等です。こういった問題を解決すべく、土壌に客土を行い、川水や地下水、降水を貯める溜池を作り、防風対策を取ることで温度を少しでもあげる方法を考えております。
- ・モンゴルの農業は季節的で、冬期間は農家の奥さんたちは仕事がない状態です。日本で学んだ加工技術を生かして冬季限定加工品工場を立ち上げ、農家の奥さんを職員として雇いたいと思います。加工品はコロッケ、青トマトジャム、グミ、クッキー等を考えております。

最後に、感謝の気持ちを込めてお礼を言いたいと思います。

日本で6か月の研修を受け、日本語、日本文化に触れながら農業の高度な技術を身に付けることができました。研修中に自分の地域に普及させたい多くのアイデアをつかむこともできました。これからは、帰国後日本で身に付けた技術を生かして自分の地域の発展を図りたいと思います。自分の持っている技術を一生懸命教えてくださった農家さん、指導員、専門家の皆様や滝川で大変お世話になった我々の研修を担当してくださった滝川市の職員、CLAIRの職員の皆様に感謝の気持ちを込めて心よりお礼を申しあげます。この6か月間本当にありがとうございました。





研修用の小田んぼで苗を植えています



研修用の実習畑でトマト、キュウリ、ナス、トウモロコシなどを植え管理しています。



メロンの種を蒔いています。

## 平成 25 年度自治体職員協力交流事業報告書

氏 名 ナムジルスレン アルタンツェツェグ  
出身国 モンゴル国  
受入自治体 北海道滝川市  
研修先 滝川市市役所



### 1. 本事業に応募した動機

自分の地域に日本の農業技術を導入し、農作物の種類を増加を図る、また自分自身の技術力を向上させ、日本語・日本文化・日本国について学ぶことを目的にこの研修に参加した。

### 2. 研修の概要

日本の農業分野における制度、稲作栽培や野菜、果実栽培方法等農業に関する幅広い技術と知識を身に付けると共に日本語・日本文化に触れることができた。例えば：

- ①滋賀県大津市で1か月日本語・日本文化を学んだ。
- ②6月20日に滝川市に到着し、農業技術研修に参加した。研修で稲作栽培方法を詳細に習う他、イチゴ、メロン、リンゴ等の果実、玉ねぎ、トマト、秋蒔き小麦、豆等の野菜の栽培方法、接ぎ木、管理方法、堆肥の作り方等を市内の農園で学んだ。
- ③滝川市以外に札幌、美唄、富良野、旭川、新十津川、岩見沢、砂川、芦別等の自治体に属する研究機関、葡萄農園、もやし工場等を見学した他北海道の農業現状、普及センターの活動、政策等について幅広い知識を得ることができた。
- ④滝川市のNOSAIの経営概要、農家に対する活動、道の駅、トマトの家、リサイクリーン、農協の活動を見学し、市農政部営農振興室で植物の肥料を吸う力、土壌診断の簡単な方法等を教わった。
- ⑤農産物加工実習で各種の野菜や材料を使った日本料理を始め豆腐、バター、ソース、サラダ、クッキー、ジャム等の作り方を教わった。
- ⑥日本語会話の授業を1週間に1回受けたことは研修に役に立った。

### 3. 帰国後の展望

日本で受けた研修を参考に次の活動を予定している。

- ①稲作栽培実施の促進を図る。
  - ・30日苗と40日苗を育苗する。
  - ・適地を選び、作付けを行う。
  - ・露地栽培を拡大する。



②野菜、果実、麦の収穫量の増加を図る。

- ・モンゴルでは麦、ニンニクの種を春播きしているので秋播き方法を挑戦する予定である。
- ・私の地域ではリンゴ、メロン、イチゴ栽培は一般的ではないので地域で栽培し、農作物の種類を増やしたいと考えている。
- ・玉ねぎとニンニクの需要が高いにも関わらず販売用に栽培する農家はほとんどありませんのでこういった野菜の販売用栽培を普及し、地域に供給したいと思う。

③農産物加工方法を普及させる

- ・ジャガイモ栽培が盛んなので値段が安く、簡単に手に入ることからコロッケ作りを普及させるべきだと思う。
- ・カボチャ、大根を作っている農家がいるが食べ方が分からないという問題がある。また秋の赤く成らなかったトマトやカボチャ、大根を使って加工品を作る方法を普及させたい。

④グループ活動の向上を図る

- ・トマトの家の女性たちの経験を元に地域の主婦のグループを作り、農産物の加工を行いたい。
- ・地元の農家の野菜や農産物加工品、手芸品などの販売ができる道の駅のような施設を設立したい意志を上司に伝えたい。

⑤堆肥を利用することの良さを広く伝える

- ・研修中に市内の野沢農園で無農薬栽培について話を伺った。野澤さんは、以前農薬により体調を崩した経験があるため10年前から無農薬栽培を実施することを決意し、野菜の収穫量は化学肥料を使うより少ないが、単価が高いので採算が合うとのこと。モンゴルでは堆肥を使うことは一般的なもので今後も化学肥料の利用を避け、堆肥の安全性を地域に広く伝えたい。

⑥単純な土壌診断方法を農家に伝えたい

- ・滝川市農政部営農振興室では手で触って土壌診断ができる単純な方法を教わった。何でも機械で行う日本でもこんな単純な方法を使っているのに驚いたがモンゴルに簡単に導入できる方法なので是非自分の地域に広めたい



我々研修員は **LGOTP** 事業に参加することで農業の高度な技術を身に付けることができました。当事業の実施に関わる **CLAIR**、受け入れ自治体の滝川市、全農園や指導員の皆様に心より厚くお礼を申し上げます。

#### 事業の関係者

##### ファーム

佐藤ファーム

白水ファーム

津坂ファーム

中村ファーム

中村果樹園

野澤ファーム

山木ファーム

##### 指導講師

五十嵐初江様

尾崎静子様

阪本康雅様

本所和久様

丸岡孔一様

##### 研究機関

遺伝資源部

岩見沢農業試験場

浦臼ワイン農場

上川農業試験場

トマトの家

花野菜技術センター

美唄林業試験場

ホクレン種苗センター

##### その他関係機関

あぐりこ合同会社

セイコーマートミニ

トマト栽培所

空知土地改良区

空知普及センター

中空知農業共済組合

深川まあぶ工房

富良野チーズ工房

ホープ 株式会社

リサイクリーン

CLAIR

JIAM

滝川市長様

滝川市農政部

滝川市国際課

滝川国際交流協会



## 日本の経済交流・環境保護について

氏 名 李 博  
出身国 中華人民共和国  
受入自治体 岩手県  
研修先 岩手県庁



2013年5月19日、私は大連市環境保護局の推薦と大連市政府の派遣で、2007年から大連市政府と友好提携を結んだ岩手県に、一年間の研修に来ました。時間が経つのは早いもので、後3か月で研修終了の時を迎えることになりました。この9か月の間には日本の生活、日本の自然と社会環境などに触れることが出来、また、素敵な出会いがいっぱいあって貴重な経験となりました。

### 1. 本事業に応募した動機

私が大連環境管理部門の公務員として、自治体職員協力交流事業（LGOTP）に参加した最大の理由は、この事業が自分の経験として、環境保護事業に絶対貢献するものと信じたからです。何らかの形で貢献できることはとても喜ばしいことです。外国での生活は、知識を豊かにしてくれるだけでなく、その国の歴史、文化、風習や習慣を学ぶ絶好のチャンスでもあります。

### 2. 研修の概要

#### (1) 全体研修

当プログラムは2013年5月19日に始まり、2014年5月19日に終了となります。まず、4日間の東京滞在では多文化交流のオリエンテーションと日本の政府機関を訪問しました。次に、滋賀県大津市で約1か月間の日本語の勉強といくつかの歴史的・文化的遺産を訪問しました。

#### (2) 専門研修

##### ①一般行政研修

その後、6月の末に専門研修先の岩手県に来ました。岩手県に到着して最初の一週間は、NPO・文化国際課で岩手県の概要、多文化共生、県の組織、そして県民計画、復興計画について説明してもらいました。県の概要説明を通して、岩手は日本で北海道に次ぐ面積で、自然豊かなところだと紹介され、後の研修生活を通して確かにそうだと感じました。

また、県議会を傍聴し、議会について色々説明してもらいました。議会は市民の代わりに行政の監督役を果たす存在であり、市民の声を代表する議員さんたちなので市民の選挙によって選ばれるということがわかりました。

## ②専門研修

### ◆経済交流分野

日本貿易振興機構(ジェトロ)兼盛岡貿易情報センター、いわて産業振興センター、岩手県産株式会社、岩手県観光協会等を訪ねて、それぞれの機構の状況を教えてもらいました。皆さんは共に岩手の復興のために頑張っていると感じました。

東日本大震災津波の発災以来、被災者の幸せな生活を取り戻すために、岩手県民はずっと一生懸命に頑張っています。そういう姿を色々な場合でよく見ます。また、岩手県政府は県民一丸となって復興に努めています。原発事故による放射性物質の影響について「震災前よりも安全・安心」を目標に、産地として、消費者の皆様へ安全・安心な県産農林水産物等を提供していくため、関係者一丸となって、生産管理対策の徹底や除染対策の実施、県産農林水産物等の放射性物質の計画的な検査、速やかな情報提供等を行っています。

2014年2月7日には、東京ビッグサイトで開催された「第77回東京国際・ギフト・ショー春2014」を視察しました。

このショーは、日本最大のパーソナルギフトと生活雑貨の国際見本市です。出展社数は2,400社を数え、出品アイテムの種類の多さは日本一です。

主に見学したのは地方の物産が集中しているエリアでした。各県の中で印象に残ったのは、岩手でした。秀衡塗、浄法寺塗等伝統的工芸品は伝統的技術・技法を伝承して「ものづくり」をしています。

日本の伝統的工芸品産業は、伝統的技術・技法を伝承するとともに、国民生活に豊かさと潤いを与えてきた産業であり、地域の資源・技術を基盤に、もの作り産業を形成し、長い歴史・風土の中で培われ、地域経済の発展と、雇用の創出に貢献していることを再認識しました。



国際・ギフト・ショー見学

### ◆環境保護分野

岩手県環境保健研究センターを見学しました。大気汚染、水汚染、ダイオキシン等を調査する為の色々な施設の他に、放射線監視装置(モニタリングポスト)もあります。岩手県環境保健研究センターは、よく世界各国の大学の環境学院などの環境機構と交流しています。色々な情報を得て、日本の環境技術や環境品質は一流だと思いました。



盛岡市クリーンセンターを見学し、ゴミの分類、収集、運送、処理などの技術を学ぶことができました。日本は、ゴミ処理とリサイクルを非常に重要視していると感じました。

盛岡市はゴミの焼却の際に発生する廃熱を利用した発電設備や熱交換設備による冷・暖房、給湯への利用のほか、余熱利用健康増進センター「ゆぴあす」を開設しています。「ゆぴあす」ではクリーンセンターから送られた熱を、プールや浴場の水を温める熱源として利用するほかに、施設内の空調・給湯・冷暖房・融雪にも熱を利用しています。

また、環境学習などのパンフレットを通じ、日本人の環境を守る意識や、豊かな自然環境を作るために努力していることを強く感じました。

中国に比べ、日本では羨ましいほど深刻な環境問題がありません。色々な公害を克服した日本の環境問題に関する改善の仕組みは中国に非常に参考になると思います。また、日本での環境教育の推進体制、NPO 組織に対する行政上の支援などについても大連で活用したいです。



盛岡市クリーンセンター見学

### 3. 帰国後の展望

今回の研修で得た経験により、私自身の専門的な視野を広げることができました。日本で学んだ知識は、帰国後も、必ず役に立つと思います。この1年間で感じて学んだことを中国に戻って地元の開発と発展のために努力しながら、微力ではありますが両国の理解を深めるために力を尽くしたいと思います。

### 4. 終わり

このような研修の場を提供して下さいました岩手県庁、CLAIRの皆様に感謝します。また、日本に来た私たちを迎えにきたCLAIRの皆様、岩手の研修中大変お世話になりましたNPO・文化国際課、産業経済交流課、公益財団法人岩手県国際交流協会の皆様、そして、私を心配してくれた皆様大変ありがとうございました。

## 日本の環境保護を学んで

氏 名 ジャンホム ソンクム  
出身国 タイ王国  
受入自治体 茨城県結城市  
研修先 結城市役所



### 1. 本事業に応募した動機

日本は、私がいちばん行きたいと思っていた国であった。日本で暮らした経験から言えば、日本の人々は時間を厳守するなど、規律正しく、長寿であるとともに、世界レベルの技術を牽引している。

結城市と城西病院で日本の人々と働く機会を得た私は、日本人が仕事をとても重視しており、とても思慮深いことを学んだ。しかし、その時は私の日本語能力が妨げとなって、日本人が行儀良いだけでなく、とても質の高い生活を送っている理由を知ることが難しかった。日本の文化についてもっとよく知ることにも役立つため、私はこのプログラムに参加することを志願した。いちばん重要な役割を果たしたのは、メーサイ市の管理チームで、私がこの貴重な機会を得ることを励まし、支えてくれた。

### 2. 研修の概要

(1) 日本語。現在では、私は日常生活において、また研修中における日本人との会話で日本語を使うことができる。



高齢者の介護予防を見学

(2) 結城市における住民の健康管理制度。日本の住民健康管理は、市民全員が自らの健康管理に参加することを促進する、きわめて優れた制度である。

(3) 廃棄物管理。日本は、公衆衛生基準が高い国の1つである。私は調査に基づき、日本人はとても協力的で公に対する責任が強いことを知った。人々がゴミの分別をよく認識し、街中でゴミを捨てないことがその例である。日本の廃棄物管理は家庭の一般ゴミ収集から、環境に影響を及ぼさないハイテクを用いた処分まで、廃棄物処理のあらゆるプロセスにカバーされていて、きわめて巧みに体系化されている。

(4) 廃水処理。私は、市の下水道について研究する機会を得た。廃水処理システムはきわめてすぐれており、健康のために設計されている。小さなコミュニティに



おける小規模な廃水処理システム、人口が多い都市部における廃水処理システム、それに小規模システムによっても大規模システムによってもカバーされない僻地の家庭用システムなどがあるが、すべてがきわめて有効である。川に自然放流する前に、廃水をきれいな水にすることができる。



金属のリサイクル会社を見学

- (5) その他：日本の文化と組織文化。日本は世界をリードする技術国のひとつであるが、日本の人々がいまなおとても優れたやり方で伝統文化を保ち、維持できていることを、私は夏祭りやお神輿などの祭から観察することができた。日本の企業文化も、人が責任感を高めることを促して、継続的発展のための優れた労働環境を生み出すのに役立ち得る。

### 3. 帰国後の展望

日本のような先進国で学び、経験を得るチャンスを与えてくれたこのプログラムは、とても優れている。私は、ここで学んだことのすべてを以下のようにして自国に応用するつもりである。

- (1) 廃棄物管理。私は下記のようにして、市の廃棄物決議を打ち出すことをメーサイの管理チームに提案する。
- ①メーサイ市の管理チームに、この廃棄物管理の経験から得た知識をすべて提示する。最初は、廃棄物プロジェクトを解決することである。
  - ②毎日のゴミは、市または政府だけの責任ではなく全員の責任の一部でもあることをより良く理解するために、子供を含めたメーサイの市民全員と廃棄物処理の知識を共有し、伝えることで、廃棄物についての認識を生み出す。
  - ③一般ゴミの分別に従って、ゴミの分別とメーサイで改正されたゴミ収集システムを促進する。
- (2) メーサイ市の一部が直面しているもう1つの問題である廃水処理。メーサイ市地域の一部において下水道建設を継続する計画。私はこのことについて研究する機会を得たので、この問題はぴったりである。結城市には技術があり、下水道管理システムがきわめて有効に機能している。メーサイ市地域におけるソリューション実施の手引きとして、私はこの概念をメーサイ市の管理チームに提示するつもりである。
- (3) 特に高齢者に対して自己管理とグループで一緒に保健活動を行うことを奨励することにより、住民健康管理を促進する。
- (4) 朝礼活動、時間厳守や省エネ・省資源行動などの優れた規律といった日本の労

働文化を誰とでも共有する。

- (5) 将来的に日本人とコミュニケーションができるように、自国でも日本語の練習を続けるつもりである。
- (6) 結城市とメーサイ市間の良好な関係を保ち、維持する。



夏祭りに参加



## 日本で過ごした経験について

氏 名 エチナ タイース ウンベハウ  
出身国 ブラジル連邦共和国  
受入自治体 群馬県  
研修先 学校



### 1. 本事業に応募した動機

日本での自治体職員研修プログラムに参加することにした理由は、実際に東洋文化を経験できると思ったからです。私は、ブラジルで20年以上武道を続けるなど、それまでにも東洋文化（日本と中国）に関係することに触れる機会がありました。

### 2. 研修の概要

日本の公立学校に入学する外国人児童生徒は毎年増加しており、それに伴い学校では新たな実態が発生し、学校現場や家庭などに今までなかった局面をもたらしています。群馬県内で私のカウンセリングを希望した学校は19校でしたが、研修員が私1人であることを考慮し、8校（公立小中学校：7校、ブラジル人学校：1校）を選定しました。学校で実施した取組は、校長、教員、児童生徒、保護者や家族を対象とし、校長との打ち合わせ、研修スケジュールの作成、教員へのオリエンテーション、児童生徒への個別カウンセリングやグループ・カウンセリング、家族カウンセリング、教員へのセミナーやワークショップ、学校行事の観察、教員向け講習への参加、文化祭の観察などを行いました。

この研修を通して分かったのは、大半の問題は生徒が生まれる前から発生していることです。何よりも、家族構成、保護者が置かれている社会的な現状、学校制度などに起因しています。そのため、身体的、認知的、心理社会的な要素だけではなく、全体からみて状況を判断する必要があります。その人が置かれている社会・文化的背景などの状況を考慮し、取り組みを行わなければなりません。これから述べる内容は、外国人住民の生活（児童生徒、家族、ブラジル人社会と日本人社会）の改善を進めるために不可欠な要素です。また、それぞれが繋がっていることが分かります。

#### （1）複数の言語環境にある児童生徒の学習プロセス

これらの児童生徒の思考は、その形成過程や生活リズムによって異なっています。思考は使用する言語の読み書きや会話により形成されますが、それには言語の構成が深く関わっています。例えば、“わたし”という言葉を使う場

合、少なくとも5つの言語的な観点があります。表象、その言葉自体の意味、言葉の組み合わせ、文法的な構成と思考の整理。もしも、その児童生徒に解読能力がなければ、使用言語と思考は異なった意味を生じることになります。しかし、このことをもって言語を学習する能力がない、あるいは能力が限定されているとは言えません。言葉の意味づけができていないだけで、言語の学習能力の遅れは一時的なものと考えられます。

#### (2) 情緒面および行動面の問題

児童生徒の情緒的な発達および変化が、友人や教員への接し方、あるいは自分自身に対する認識に反映されます。家族で過ごす時間よりも学校で過ごす時間の方が長いため、学校生活がより大きな影響を与えます。例えば、身体的な症状（頭痛、胃の痛みなど）を示すものの、診断では異常がみられないケースや、想定外の行動（頻繁に泣く、失禁、自傷行為、ドロップアウトなど）をとった場合などに、これまで学校生活で観察された行動の情報収集、児童生徒の経歴、身体的な診断（必要に応じて医療を受診する）に基づいて、学校で対応できるか、あるいは専門家による対応を依頼するかを迅速に判断しなければなりません。また、この問題の多くは、出生前に母親等が置かれた環境に起因しています。これらの症状を示した児童生徒には、学校、家族および専門家など、複合的な観点による取り組みが必要となります。

#### (3) 日本での生活に伴う環境適応プロセスと地域との一体化

生活環境に注目すること、自分が安心できて親近感を覚える場所を持つことが求められます。この場所は時とともに変わったり、増えたりすることもあります。また、どのようなケースでも自分が住んでいる地域と一体化することが必要です。

#### (4) 度重なる転校とその結果

適切なりテラシーが獲得できず、交友関係に繋がりもなく不安感を抱えるようになります。

#### (5) 外国人児童生徒への教育支援

公立学校に在籍する外国人児童生徒は増加傾向にあり、長期化する現状があります。既存の国際教室や日本語教室だけでは負担が大き過ぎます。

#### (6) 法制度に関する側面

外国籍の親を持ち、日本で生まれた子どもの国籍についての考え方を見直す必要があります。

#### (7) 本研修の内容



私が学校での支援活動をするにあたり、日本の社会情勢や制度を知らないことで、児童生徒や保護者、教員との認識にギャップを生じることがありました。

### 3. 帰国後の展望

研修での経験と東洋文化から得た知見を活かして、児童から高齢者まで適切なメンタル・ヘルスに関する指導を行うとともに、東洋文化の様々な側面と繋がりを持った心理ケアを行うプロジェクトの開発を続けていきたいと考えています。



児童への個別カウンセリング



家族カウンセリング

## 日本での研修経験について、感じたこと

氏 名 マルチンス ドス サントス ナガオ  
ブレナ カルラ  
出身国 ブラジル連邦共和国  
受入自治体 富山県  
研修先 高岡市立野村小学校



### 1. 本事業に応募した動機

十数年前、私は両親の仕事の都合で家族と来日しました。しかし、出稼ぎに来るブラジル人はブラジル人だけと生活を共にするため、日本語はあまりできるようになりませんでした。ブラジルに帰国した後、もっと日本語ができるようになりたいと思ったので、大学で日本語の勉強を始めました。

また、大学では教育のことにすごく興味がわいたので、大学院では教育について細かく勉強しました。マスターコースを終えたとき、ドクターコースで日本の教育とブラジルの教育の関係を課題として取り組みたいと思いました。その時、富山県からの教育研修についてのお知らせを見つけ、この事業に応募しました。これは教育と日本語の両方の勉強になる機会なので、この事業に参加できてとても嬉しかったです。

日本で教育、文化、国語、出稼ぎの生活などについてもっと勉強するために、熱意をもって日本に来ました。

### 2. 研修の概要

#### (1) JIAM—全国市町村国際文化研修所での研修

専門研修をより良いものとするために、富山県に来る前、JIAM で約1か月間の日本語研修を受けました。そこでは素晴らしい CLAIR のスタッフと JIAM のスタッフや先生方から多くを学びました。言語を勉強する時、皆さんは文法の勉強だけではなく、日本でのマナーや文化などについても教えてください、感謝しています。

JIAM では授業を受けたり、また、宿題やプロジェクトワークの発表をしたりしました。授業では「みんなの日本語」という教科書を使いしましたが、先生方の準備はいつも本の内容以上であり、素晴らしいなと思いました。先生方の教え方を見ることは、日本語そのものを学ぶ以上の勉強になりました。

JIAM での発表、自己紹介、作文を書く練習などの経験によって、私は少しずつ専門研修を受ける自信をもちました。また、他の国から来ている研修員と知り合い、いろいろな国の文化も少し勉強できました。JIAM での文化交流は楽しかったです。



## (2) 野村小学校での研修

私の専門研修は野村小学校で行われました。その学校にはブラジル人の児童が多いので、私は子どもの学校生活をサポートしながら研修を進めました。富山県に住むブラジル人は、いろいろな理由で日本人学校に入学しています。ずっと日本に住みたいという理由から、あるいはブラジル人学校の近くに住むことができないという理由から、日本人学校で生活をしています。



児童たちと畑の授業

日本で生まれたブラジル人の子どもは、異なる2つの生活環境で過ごしています。家族とポルトガル語で話したり、ブラジルのテレビを見たり、また、ブラジル人のマナーも守ったりしています。そしてまた、学校では、日本のマナーや文化を守った生活を過ごしています。それ以上に、ブラジルで生まれた子どもが日本に来るともっと大変です。2種類の文化に合わせて生活するだけでも大変なのに、その上ブラジルでの生活を思い出し、日本とブラジルの生活を比較するので、感傷的になりやすいです。ですから、日本で生まれたブラジル人の子どももブラジルで生まれたブラジル人の子どもも、どちらも大変な生活を送ることになるでしょう。文化の違いを超えて、彼らは国語の難しさを克服しなければなりません。これはすごく難しい問題なので、毎年この事業で来日するブラジルの先生がブラジル人児童をサポートすることは大切なことだと思います。

毎年来日する先生は、野村小学校の「日本語教室」でサポートをします。その教室は、外国人に日本語を教えるため、また、子どもたちが学校の普通授業の内容についていけるように補習するためにあります。そこでは日本人の先生方と翻訳者の方が指導して、研修員はその支援をします。日本人学校の中にはこのような特別な方法はあまりないと聞きましたので、この学校からのイニシアチブは素晴らしいなと思いました。



書道の体験

どんな児童にも、勉強をすることには難しさがあるでしょう。しかし、ブラジル人児童には、日本人児童より多くの困難があります。彼らは最低限日本語を理解しなければならず、その上、教科の内容を理解しなければなりません。ですから、「日本語教室」で補習を受けています。それぞれの児童は自分のレベルに合ったプリントで算数や国語の勉強をし、分からない所は私と他の先生方が教えます。児童は一人一人レベルが違うので、私たちの教える内容は、国語では「カタカナ」から「漢字」まで、算数では「足し算」から「文章問題」までさまざまです。



また、1年生から6年生の普通授業を見学させていただきました。いろいろな教科の授業を観察しましたが、先生方の教え方は素晴らしいので、良い勉強になりました。先生方は内容を教えながらいつも子どもの感想を聞いており、コミュニケーションに富んだ動きのある授業でした。

野村小学校で研修を受けて、日本の公立学校は素晴らしいと感じました。日本の公立学校の設備はブラジルの公立学校より良いです。日本の学校では、児童は理論だけの勉強ではなく、音楽室や理科室などを利用した体験的な学習もしています。他にも、児童は毎日、そして夏休み中でも宿題を貰ってそれに取り組むので、感動しました。

ブラジルは広くて、さまざまな公立学校があります。設備が整っていない学校も素晴らしい設備をもった学校もあります。日本の公立学校とサンパウロ州の公立学校の設備は全然違います。一般的に、サンパウロ州の学校にはコンピュータ室と普通教室はありますが、プールや音楽教室がありません。

それを変えるために、現在プロジェクト教育を進めています。

また、全体的に児童の態度も良くないので、教えるのが大変です。勿論、日本でも手のかかる児童はいますが、ブラジルほど大変ではない気がしました。ブラジル人の友達に日本の学校の話をしたら、皆が感動するほどです。しかし、私たちブラジル人教師は、自分たちの国の教育を進めるために頑張っているのです。日本で学んだことを彼らに伝えたいです。それが彼らの勉強になり、ブラジルの教育が少し良くなるかもしれないからです。



立山—富山の観光スポット

研修中は、教師の仕事だけではなく、できる範囲で通訳の仕事もしました。通訳を通し

て、学校の細かい生活について分かりました。また、ブラジル人児童の保護者と話をすることがあったことも良かったです。野村小学校は保護者に安心してもらうために、お知らせや電話など何でもしていて、それも素晴らしいと思いました。

### 3. 帰国後の展望

日本で学んだことは全て、日本とブラジルの教育のために生かしたいと思います。まず、自分の学校と、また機会があれば他の学校でも、研修の経験を語って、考察をしたり、日本語を教えたり、日本の文化について伝えたいと思います。

確かに、この経験は私を変えました。他の国の学校で研修したことで、自分の国のことをいろいろ考えさせられました。ブラジルに戻ったら、もっと考えることになるかもしれません。今、私が本当に大事な勉強になったと感



じること、つくし学級の先生から学んだ、「児童は先生のマナーを見ながら、先生の優しさ、忍耐と教える気持ちを感じて、勉強に興味を出して、元気に学校生活を送る」ということです。私が帰国したら、その先生みたいになれるよう頑張りたいと思います。

#### 4. おわりに

まず、野村小学校の職員室の皆さんに本当に感謝しています。外国人の先生を受け入れて、自分の授業を参観させてくださいました。とても大変なことだったと思いますが、皆さんは私の研修がより良いものとなるように手伝ってくださいました。児童にも、通訳者の方にも、本当に感謝しています。

最後に、CLAIRの皆さん、JIAMの皆さん、富山県庁の皆さん、国際センターの皆さん、南米協会の皆さん、日本でできた友達に、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。本当にお世話になりました。

## 快適な市民生活を支えるために

氏 名 林 善美  
出身国 大韓民国  
受入自治体 福井県福井市  
研修先 福井市役所



### 1. 本事業に応募した動機

人口問題をはじめ社会全般について、今の韓国は 10 年前の日本と似ていると多くの人が語っている。

例えば、今、韓国で取組み始めた市民協働のまちづくりの場合、水原市では、2 年前から「まちルネッサンス事業」として実施しているが、これは、人口の減少、少子高齢化の問題から故郷を守るため、行政と市民たちが一緒に取り組む施策であり、10 年後の社会を見越して推進している取組みである。

日本は、このような問題に約 20 年前から取り組んでおり、多くの事例を持つ。日本の行政での研修を通じて、未来の韓国の行政施策に活用する先進的な取組みや考え方を学ぶため、事業に応募した。

### 2. 研修の概要

#### (1) 全体研修

##### ① 東京研修 (CLAIR) : 2013. 5. 19 ~ 5. 22

日本の行政のしくみ等の研修  
重要機関の見学

##### ② 日本語専門教育 (JIAM) : 2013. 5. 23 ~ 6. 19

日本語学習  
職場のエチケットや日本文化学習 (茶道、日本の伝統)  
ホームビジット  
防災センターでの地震・大雨時の対応方法学習

#### (2) 受入団体研修

##### ③ 福井市研修 : 2013. 6. 20 ~ 2014. 5. 18

ア 一般行政研修 (福井市の行政一般に関する研修、21 所属)  
イ 専門研修 (公園管理及び緑化に関する研修、公園課)

受入団体の研修を受講し、水原市と福井市とでは、大きな違いが 2 つあると感じた。

1 つ目は、どの行政分野でも、福井市は水原市より市民協働の意識が浸透しており、行政職員・住民ともに協力してまちを作るという意識が高いこと



である。

2つ目は、過去に、大地震、洪水の経験から、防災と安全を第一に考える都市設計をしていることである。

市民協働分野で、特に、まちづくり事業は、実施からすでに20年あまり経過し、地区にも定着しているため、今後は、問題点を解決するために新たなしくみを模索する段階であることが印象的だった。昨年、福井市を訪れ、福井市東郷地区のまちづくりを視察した水原市長訪問団や、まちづくり研修訪問団も同じ感想を持ったと聞いており、市民協働は、両市の新たな交流分野になりうると感じた。



動物公園での研修風景

そして、都市計画の分野についても、約10年前から市民協働に取り組んでおり、例えば、地元住民が満足できる区画整理事業のためにワークショップを実施、公園建設にあたっては、地元の人の声を最大限に反映できるしくみがあるなど、参考となる取り組みも多かった。

また、防災と安全の都市設計では、大雨時の排水路があり、その排水経路や大雨時の対策、避難方法について明確に管理していることが印象的だった。

その他、人事制度では、日韓で組織の管理方法や昇進試験方法など多数の違いがあった。

一方、専門研修は、公園課で約1か月間行われた。

希望した公園管理と緑化推進に関する内容であり、日韓で同じ点と全く違う点があり、大変興味深かった。

同じであったのは、高齢者や障害者に配慮したユニバーサルデザイン化を推進している点であった。

一方、大きく違ったのは、公園に関する法律自体と、日本での公園行政が最重要視しているのが、防災施設としての公園造成であることであった。

災害が多い国家的な特徴上、防災施設としての役割が最も重要と考えられており、整備予算が防災安全の科目であったり、災害時の避難場所として必ず広場を設置したり、災害時に必要な備蓄品や災害放送のためのスピーカーを設置したり、という取り組みがなされていることに驚きを感じた。

そして、近年増加する集中豪雨への対応として、降水時、広場や運動場へ雨水を貯蔵可能な公園が増加しているとのことで、実際の現場を見学することもできた。

これらの研修を受講して、韓国は自然災害が比較的少ない国家であるが、安全性をさらに高める余地があるということを感じ、現在、休憩空間として重要視されている公園美観を保ちながら、さらに安全性を確保する必要があると思った。

### 3. 帰国後の展望

日本や福井市は、市民協働の歴史が韓国に比べて長く、市民の声を聞くしくみや制度が多く運用されている。

今回の研修でも、福井市のまちづくり事業、パブリック・コメント制度、区画整理地公園建設にかかるワークショップ、身近なまちづくり推進のしくみなど、この分野について多くの施策を学ぶことができた。

市民協働を上手く推進することができれば、予算の削減がはかれるだけでなく、行政への不満を最小化することが可能かもしれないと考える。

しかし、過度な市民協働の推進は、特に、私の専門分野である公園管理については、その質を落とす危険性もはらむ。

法律等の違いをはじめ、人々の意識や利用層の違いなどがあり、福井市の取組内容を、そのまま水原市の施策に生かすことはできないが、帰国後は、福井市の研修で得た施策を同僚と共有し、韓国での公園管理における適度な市民参加がどのようなレベルであるのかについて検討を重ね、業務に生かしていきたいと考えている。



## 山梨県での研修を振り返って

氏 名 ヘナタ ムインニョス ペレイラ  
出身国 ブラジル連邦共和国  
受入自治体 山梨県  
研修先 観光部国際交流課



### 1. はじめに

8か月間の研修を通して、専門研修に関するだけでなく、山梨県では観光・食・文化も含めた多くの貴重な経験をすることができました。このレポートではここで体験したいくつかのことについて振り返りたいと思います。

### 2. JIAMでの事前研修

山梨県に来る前に滋賀県のJIAMで主に日本語についての特別研修がありました。月曜から金曜まで講義がありましたが、週末はフリーでしたので主に関西の各地を観光することができました。奈良、大阪、京都、神戸、そして名古屋にも何度か行きました。この期間は日本語の語彙を習得するとともに、日本人や日本文化にはじめて触れる機会でしたので、とても充実した時間を過ごすことができました。



### 3. 山梨県での専門研修

#### (1) 国際交流に関すること

2週間の語学研修の延長ののち、7月初めに甲府に来ました。最初の1か月間は甲府での生活、とりわけその暑さに慣れるために大変でした。この期間に私は日本の政府システム、そしてこれらの改革と変化について学びました。これらについてのレポートをまとめることを通して、日本とブラジルの状況に似た部分があると感じました。



また、この期間に、国際交流の取り組みをおこなっている県内の大学や団体のプログラムに参加することもありました。例えば大学の看護学部で患者が必要とするケアを提供するため外国語でコミュニケーションをはかる試みを行っており、そこへ参加しました。また、富士吉田市に行き、現地のタクシードライバーや観光業者、レストラン経営者に、外国人観光者への対応に関する研修を行いました。

8月になると私の研修内容は少し変わりました。8月5日には山梨県観光部の職員として中国の大学生グループに付いて富士山に登りました。私たちは2合目を午前3時に出発し、夜には下山しました。11時間もの登山でとても疲れましたが、それだけの価値がありました。同じ週に、富士山がユネスコ世界遺産に登録されて外国人観光客が増えたことから、県の観光資源をプロモーションする県庁の観光CMの撮影に参加しました。他の外国人職員と一緒にとったこのCMは全国ネットで数週間放映されました。

さらに私は観光情報の発信のため、ブログの記事も書きました。



## (2) 環境行政に関すること

わたしはミナスジェライス州環境局に配属されていたので、環境行政について関心があり、8月の終わりから山梨県の環境行政の抱える問題について職員による説明を受けたり、いくつかの関連施設への見学を行いました。

8月22日には山梨環境科学研究所へ見学に行きました。ここは1997年に設立され、4つの分野について研究、教育、情報提供、地域協力等の活動をすすめています。当日はガイドツアーを組んでもらい、地球温暖化、富士山の地下水が環境に与える影響、富士山周辺の溶岩における酵母に関する研究、野生動物（主に鹿）と環境の関係などの説明を受けました。この視察はとても有意義であり、山梨県の自然保護への積極的な姿勢を窺うことができまし



た。

そのほかに山梨県森林総合研究所も訪問しました。そこには3つのセクションがありましたが、それぞれ、すぐれた森林の造成と資源の効率的利用を目的とした林学研究、研究成果の普及とニュースレターや報告書を通じた情報提供、青少年に対する森林保護教育にあたっています。同じ日に富士川町の植林地を見学し、森林の維持と経営が山梨県にとっていかに大事なものかを理解することができました。

さらに7月31日と11月21日には山梨県の森林環境政策に関する審議会を傍聴しました。この会議の中では、鹿の頭数コントロールと富士山周辺の環境保全について広く議論されていました。



### (3) ミナスジェライス州との交流

9月にはブラジル・ミナスジェライス州からパウロ・ホマノ農政副長官を団長とするワイン及びブドウ栽培に関する農業視察団に随行しました。まず、ワインセンターを見学し、小規模農家を支援する農業試験場を視察しました。同じ日に副知事主催の晩さん会があり、これにも随行員として出席しました。翌日以降、農協見学、ワイナリー訪問、富士山と周辺の野菜果物の販売所である「道の駅」を見学しました。



### (4) 休暇について

9月には休暇をとって沖縄旅行に行きました。那覇を訪れ、首里城や国際通りで観光を楽しみましたが、台風のためホテル内での滞在を余儀なくされることがありました。宮古島ではそれまでとちがって白い砂浜や青い海と空といった素晴らしい風景を楽しみました。

#### (5) その他の研修

10月からは通常業務に加え、次の3点で研修内容が変わりました。1つは日本語学習で、この月から国際交流センターで開催される日本語教室に通うことになりました。2つ目はグレープヴァインという年二回発行の情報提供誌の記事の執筆です。この執筆のために清里や北杜市取材し、記事には八ヶ岳と富士山の寓話を題材に選びました。3つ目はわたしが在籍している大学院への修士論文の執筆です。この研修の成果としてわたしはミナスジェライス州と山梨県の人事制度の比較を論文のテーマに選ぶことにしました。文献調査に加え、人事課をはじめ山梨県の多くの職員の方々にインタビューをしました。この論文については2014年12月に大学院へ提出する予定です。

また、仕事の合間をぬって県内の多くの観光地を訪問することができました。昇仙峡、西沢溪谷、富士吉田市、北杜市、中央市、富士五湖周辺、そして富士山にも行く機会がありました。また甲府大好き祭り、石和花火大会、市川三郷町の神明の花火大会、富士吉田の火祭りなど多くのイベントにも参加しました。また、ほうとう、とりもつなど多くの郷土料理を楽しむこともできました。



#### 4. おわりに

ここでは、わたしが体験したことを書きましたが、本当はすべてを言葉と写真で言い尽くすことは難しいくらい素晴らしいものでした。そこであった多くの人々が私を成長させてくれました。このような素晴らしい機会を与えてくださったすべての人々に感謝したいと思います。

